

# 日記のなかの南部女性——メアリ・チェスナット——

滝野哲郎

## I

サウスカロライナのメアリ・ボイキン・チェスナット (Mary Boykin Chesnut, 1823-1886) は、1861年2月から1865年7月までの4年と5ヶ月の間、周辺のさまざまな出来事を丹念に日記に書き綴ったが、この期間は南北戦争とほぼ時期を同じくしている。彼女が日記を書き始めるのと相前後して、1860年12月にサウスカロライナ州が連邦から脱退、翌年の1861年4月には南部連合軍がチャールストン湾の連邦軍サムター要塞を砲撃したことが切っ掛けとなって南北戦争が勃発する。そしてそれから4年を経過した1865年4月、南軍リー将軍がアポマトックスで降伏し南北戦争は事実上終結をみることになるが、チェスナットの日記もその3ヶ月後に終わっているのである。

南北戦争が終結して16年が経過した1881年、チェスナットは戦時中に書き残した日記に大幅に手を加えはじめ、およそ3年の月日をかけて一つの「日記」に仕上げている。<sup>1</sup>これは本来の意味での日記ではなく、戦時中のもとの日記を土台にして執筆された、回想録あるいは自伝的な要素を多分に含んだ「日記」作品と言えるものである。チェスナットは、生前この「日記」の出版を望んでいたが、実際にこれが活字になったのは彼女が他界して19年後の1905年であった。編者イザベラ・D・マーチン (Isabella D. Martin) とマータ・ロケット・エイヴァリー (Myrta Lockett Avery) が、『デイクシーから

の日記』 (*A Diary from Dixie*) というタイトルをつけ、一部を省略、編集して出版したのである。その後1949年になって、ベン・エイムズ・ウィリアムズ (Ben Ames Williams) も再び同じタイトルでこの作品を世に出している。しかしながら、これらの編者が用いた本のタイトル『デイクシーからの日記』は、チェスナット自身が意図したものではなく、また「日記」の性格を適切に言い表したものでもなかった。<sup>2</sup>

1880年代にチェスナットが執筆した「日記」作品が、完全な形でその意義を十分に認識されて出版されたのが、1981年のC・ヴァン・ウッドワード (C. Vann Woodward) の編集になる『メアリ・チェスナットの南北戦争』 (*Mary Chesnut's Civil War*) である。<sup>3</sup> ウッドワードが指摘するように、「日記」がもとの日記と大きく異なる点は、チェスナットが個人的、内面的な部分をかなり削除しているところである。<sup>4</sup> 1880年代の「日記」は他人に読まれることを意図して執筆されていたが、もとの日記は彼女が自分自身のために綴ったものであった。彼女は日記に鍵をかけ、決して他人に見せることはな

1. 1861年から1865年の間に書き綴られたもとの日記と区別するため、1881年から1884年に手を加えられた作品は「日記」と表記する。

2. Isabella D. Martin and Myrta Lockett Avery, eds., *A Diary from Dixie, as Written by Mary Boykin Chesnut, Wife of James Chesnut, Jr., United States Senator from South Carolina, 1859-1861, and Afterward Aide to Jefferson Davis and a Brigadier General in the Confederate Army* (New York: D. Appleton, 1905); Ben Ames Williams, ed., *A Diary from Dixie by Mary Boykin Chesnut* (Boston: Houghton Mifflin, 1949).

3. C. Vann Woodward, ed., *Mary Chesnut's Civil War* (New Haven: Yale University Press, 1981). 以下、MCCWと略す。この書物は、1881年から1884年の間に執筆された「日記」に、ところどころ南北戦争中の日記を補ったかたちで編集されている。

4. MCCW, p. xxvi.

かった。この日記は、戦争中、混乱状態の南部にあって多忙な日々を送ったチェスナットが、時間を見つけて書きためたもので、その日々の出来事、出会った人々、会話の断片などさまざまなことが記され、彼女の思い感じたことも率直に語られている。しかしながら、この戦争中に執筆された日記原稿のかなりの部分は紛失し、わずかに1861年の部分と1865年の一部しか残っていない。このプライベートな日記の現存している部分は、1984年、ウッドワードとエリザベス・マランフェルド（Elisabeth Muhlenfeld）によって編集され、『メアリ・チェスナットの日記』（*The Private Mary Chesnut*）として出版された。<sup>5</sup>

このように、チェスナットの戦争中のもとの日記が公にされ、1884年に出来上がった「日記」の性格が十分に理解されるようになったのは、比較的最近のことである。それ以前にも、『デクシーからの日記』を読み、その文学的な価値を認めていた批評家たちもいた。エドモンド・ウィルソン（Edmund Wilson）は、1962年、南北戦争を題材にした文学作品について論じた著書の中で、これは「まれにみる記録文書」と述べている。また、ダニエル・エアロン（Daniel Aaron）は、「多くの南北戦争を扱った小説よりもはるかに文学的である」と述べている。<sup>6</sup> 現在、このチェスナットの日記と「日記」は、南北戦争における南部社会と南部人を知るうえで貴重な記録となっている。また、そこには、南北戦争という危機的状況の中で、一人の

女性が実際どのように感じ、考えたかが明確に記されている。この小論では、このチェスナットの残した資料を手掛かりにして、一人の南部女性が南北戦争に直面するなかで、南部奴隷制社会における自分の立場、ひいては南部女性の姿をどのように捉えていたかを考察したい。

## II

メアリ・ボイキン・チェスナットは、奴隷制プランテーションを基盤とする南部の上流階級出身の女性である。彼女は、サウスカロライナ州の政治家スティーヴン・ディケイター・ミラー（Stephen Decatur Miller）を父親として、1823年3月31日サウスカロライナ州ステイツバーグ（Statesburg）に生まれた。父親は連邦下院議員や州上院議員を歴任した後、メアリの幼少期には州知事、連邦上院議員の地位に就いていたが、この父親を通して、政治の世界を身近に見ていた彼女は、しだいに政治に対する関心を育んでいくことになる。もちろん、幼少より家庭で素養を身につけ、学校においても十分な教育を施されて、12歳になると、チャールストンのマダム・タルバンド夫人が経営する学校（Madame Talvande's French School for Young Ladies）に入学、当時の上流階級の女性に求められた礼儀作法、身だしなみを学び、また、フランス語、ドイツ語、文学、歴史、修辞学、自然科学といった幅広い教養を身につけたのである。<sup>7</sup>

将来、夫となるジェイムズ・チェスナット・Jr.に出会ったのは、ちょうどメアリがこのマダム・タルバンドの学校に通っていた頃である。1840年、メアリが17歳になって数週間後に二人は結婚、カムデン（Camden）から南へ5キロ離れたマルベリー（Mulberry）・プランテーションに住まいを構えた。サウスカロライナでも有数の大規模な奴隷制プランテーションを経営するチェスナット家は、富裕な上流階級に属

5. C. Vann Woodward and Elisabeth Muhlenfeld, eds., *The Private Mary Chesnut: The Unpublished Civil War Diaries* (New York: Oxford University Press, 1984). 以下、PMCと略す。もとの日記の原稿が残っている時期は、1861年2月18日から12月8日、1865年1月の終わり頃から2月23日、1865年5月7日から6月26日である。チェスナットの日記原稿に関しては、PMC, pp. xxv-xxvii 参照。この小論では、出来る限り PMC を利用し、それを MCCW で補うことにする。

6. Edmund Wilson, *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War* (New York: Oxford University Press, 1962), pp. 277-298; Daniel Aaron, *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* (New York: Knopf, 1973), pp. 251-262.

7. メアリ・チェスナットの生涯に関しては、Elisabeth Muhlenfeld, *Mary Boykin Chesnut: A Biography* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981) を参照。

し、その息子ジェイムズも、才能と財産に恵まれた将来有望なチェスナット家の後継ぎであった。彼は、州下院議員を手始めに、州上院議員次いで連邦上院議員としたいに南部の政界において重要な役割を担うようになり、南北戦争が勃発する頃には、ジェファソン・デイヴィスなど南部連合の中心的人物たちと親交があった。妻メアリはこういった政治家、軍人そしてその妻たちをしばしば自宅で遇することになった。幼いころから政治を間近に見てきた彼女は、夫ジェイムズを通して南部の政治を観察し、夫の地位向上に意欲的などころも見せた。このように、アンティベラム期の南部において、メアリ・チェスナットは、生まれといい、育ちといい、また結婚した夫の地位といい、どの点においても典型的な南部上流階級の一員としての生活を送っていたといえる。

南部が北部と戦争状態に入ると、多くの南部人同様、さまざまな出来事がメアリ・チェスナットの周辺で起こり、彼女の生活も大きく変化する。日記をつけ始めた1861年2月頃にはすでに、南部社会がこれから直面するであろう北部との戦争の歴史的重要性を、チェスナットは少なからず認識していたであろう。そのように感じたのは、もちろん彼女一人に限ったことではない。南部人のなかには、南部の連邦離脱や開戦に際して緊張感や危機感を抱き、彼女のように日記を書き始める人々もいた。<sup>8</sup>

戦争中、夫ジェイムズは南部連合の中枢部で仕事をし、すでに述べたようにジェファソン・デイヴィスとは親しい間柄であったが、彼女自身も、そういった政治家や軍人たちの家族との付き合いの中で、とりわけデイヴィス夫人であるヴァリーナ (Varina Davis) とは長い間にわたって深い親交を重ねていた。この二人は、同じような環境に生まれ育ちそして結婚し、その

関心や考え方も非常に似るところがあったようである。南部連合の主だった人々の様子をこのように身近な立場から眺め、それを事細かに記述している彼女の日記は、当時の南部連合指導部の内情を知るうえで極めて重要な歴史的記録ともなっていると言ってよい。<sup>9</sup>

南部指導層の政治家、将校の妻たちは、戦争の進展にともない、夫とともに慌ただしく移動することが多かった。アラバマ州モントゴメリで南部連合が樹立され、その大統領にデイヴィスが就任した時、メアリは夫ジェイムズに伴い、その光景を目のあたりにしていた。1861年4月、ジェイムズはボールガード将軍の側近としてチャールストンにおもむき、サムター要塞にたてこもる連邦軍と交渉するが、決裂してしまう。メアリは、海岸沿いのバッテリー通りにあるホテルの屋上で要塞が砲撃される様子を眺めていた。また同年7月、ヴァージニア州北部マナサスで南部連合軍が連邦軍と初めて本格的戦闘状態に突入した頃、メアリはヴァージニア州リッチモンドで、ヴァリーナ・デイヴィス、リー夫人、ジョンストン夫人らとともに不安な気持ちで戦況の成り行きを見守っていた。これ以降も、メアリは南部連合軍の中枢にいたジェイムズとともに、しばしば重要な局面を身近に接する立場にあった。そして、政治家や軍人たちやその家族と接する機会が増えるにつけ、社交家であった彼女の住まいはこれらの人々の集う場ともなった。戦争が長引き、しだいに南軍にとって戦局は不利な状況になっていくが、メアリは、南部連合が混乱し、そして崩壊していく様子をこのようにその頂点で見ていたのである。

敗戦後の荒廃した南部において、メアリの生活は一変して苦勞の多いものとなった。そして奴隷制という経済的な支えを失い、チェスナット家は多額の負債に苦しむことになる。戦前とはうってかわった多難な生活の中で、メアリは時間を見つけては、戦争中の日記を材料として

8. Elizabeth Fox-Genovese, *Within the Plantation Household: Black and White Women of the Old South* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), pp.345-346; James A. McPherson, *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (New York: Oxford University Press, 1988), pp.234-275.

9. ヴァリーナ・デイヴィスとメアリ・チェスナットの関係については、Bell Irvin Wiley, *Confederate Women* (Westport, Conn.: Greenwood, 1975), pp.3-38, 82-139を参照。

創作を手懸けようとするのである。「大尉と大佐」(“The Captain and the Colonel”)、「わが人生の2年間」(“Two Years of My Life”)、「マナサス」(“Manassas”)という南北戦争を題材にした3編の小説、そしてまた詩作をも試みるが、彼女が望むような作品に仕上がることはなかった。こうして小説のようなフィクションでは自分の考えは十分に表現できないことを痛感した彼女が結局たどりついたのが、1881年から1884年にかけて執筆された日記形式の「日記」であった。<sup>10</sup>しかし、その原稿をイザベラ・マーチンに託した彼女は、出版の夢を抱きながら、再建期南部の厳しい生活の中でこの世を去ってしまう。「日記」の執筆が終わって2年後のことであった。

### III

メアリ・チェスナットは、彼女自らが言うように、「生粋の南部人」であった。彼女が生まれた1832年、サウスカロライナ州の知事の職にあった父親は、連邦の保護関税法実施を拒絶し、連邦と州の権限に関して当時の大統領アンドルー・ジャクソンと対立していた。典型的な南部上流階級という環境に生まれ育ったチェスナットは、南部人であることを誇りとし、北部人の南部批判には反発せざるをえなかった。たとえば、ハリエット・ビーチャー・ストウの描く南部奴隷所有者に対して彼女は日記のなかで何度も反論する。「『アンクル・トム』を読もうとした。読めなかった。うんざりするような内容だ」と。チェスナットにとって、この小説に登場する冷酷な奴隷所有者は、南部の実態からあまりにもかけ離れている。南部のことなど何も理解できない北部人にどうして南部人は非難されなければならないのか。チェスナットは、ストウをはじめとする北部人たちの無理解を嘆く一方、彼女の母、祖母、義理の母といった周囲の女性たちを例えに出して言う。彼女たちは、「北部の学校で教育を受け、北部人と同じ書物、同じ

新聞、同じ聖書を読み、同じように善悪の判断を下し、上品で、高潔、そして善良、敬虔で、責任感がある」。つまり、南部の方が、あのストウなどよりはるかに相手方の気持ちを理解できるというのである。北部人の思い込みに反して、南部の奴隷所有者たちは、奴隷に過酷な労働を強いるどころか、実は彼らの世話に多大な労力を払っているし、奴隷所有者のお陰で、黒人たちは「南部では奴隷と呼ばれてはいるが」、実際には「ほかのところの労働者、借地人、小作農など」とほとんど変わらない扱いを受けている。南部の奴隷所有者は、決して北部人が頭の中で思い描いているような人たちではないとチェスナットは強調する。<sup>11</sup>

このように南部人を擁護するチェスナットであるが、彼らの生活を支える労働力である黒人奴隷に対して、当時の多くの南部人に共通する偏見を持っていた。黒人は劣等人種であると彼女自身も信じていた。「黒人は、生まれつき不潔で、だらしなく、怠け者で、悪臭を放つ」。そして「もしそのようでない黒人がいれば、それは例外」なのである。こういったどうしようもない黒人たちを自分は大切に扱っているのだ、とチェスナットは考える。「人は、汚いもの、醜いもの、いやなものをどうしても好きにはなれない——たとえそうあるべきではないと頭ではわかっている。だが、彼らに優しくしてやることはできる——距離をおいて」。<sup>12</sup>

奴隷に関してチェスナットの心の動揺が見られるのは、「善良で、心優しい」とこのベツツイー・ウィザスプーン (Betsy Witherspoon) が黒人メイドに殺害された事件である。しばらくそのことが頭から離れず、日記のなかで幾度となく言及する。あのように大切に扱われてきた奴隷が、どうしてあれほど冷酷に自分の女主人を殺せるのか、チェスナットには到底理解で

11. PMC, p. 4; MCCW, pp. 381, 245-246.

12. MCCW, pp. 245, 308. 奴隷所有者の黒人観については、Winthrop D. Jordan, *White over Black: American Attitudes toward the Negro, 1550-1812* (New York: Norton, 1977), pp. 315-569; Bruce Collins, *White Society in the Antebellum South* (New York: Longman, 1985), pp. 51-66 を参照。

10. C. Vann Woodward, “Mary Chesnut in Search of Her Genre,” *Yale Review* 73 (1984): 199-209.

きない。「今まで黒人が怖いと思ったことはない。私はいままで黒人のだれ一人として傷つけたことはない。どうして彼らが私に危害を加えたいと思うだろうか」と記している。と言いつつ、おそらく無意識のうちに黒人に対して恐怖を抱くこともあったのかもしれない。「奴隷が私たちを殺そうと思えば、いつだってできる。彼らはまるでパンサーのように忍び寄って来るからだ」と彼女はいう。チェスナットは、奴隷制社会において奴隷たちの置かれた境遇を奴隷の身になって考えることはできなかった。「もし本当に奴隷制度が不愉快であるなら、どうして奴隷たちは、さっさと北部との境界線を越えて出て行かないのか。向こうに行けば、歓迎されるはずなのに」と。彼女にとって、奴隷は理解できない存在と映ったのであろうし、また理解しようと努めることもなかった。「いつも私は奴らをじっと観察している。彼らの行動は不可解で、理解の範囲を越えている」のである。<sup>13</sup>

奴隷制社会を基盤とする典型的な南部上流階級の一員であるチェスナットは、興味深いことに、奴隷制そのものに対して激しい嫌悪感を抱いていた。彼女は強く言い切る。「南部の奴隷制は、ひどい制度であり、邪悪で、非道である」と。南部の運命を賭けた戦いの真っ只中、このように批判的になれたのはどうしてであろうか。チェスナットの奴隷制批判は、しかしながら、北部の奴隷制廃止論者が唱えるものとはまた違ったものであった。寛大で世話好きな奴隷所有者が、不潔で怠惰な黒人奴隷の面倒を見ているという南部奴隷制であるにもかかわらず、彼女が奴隷制は悪であると考え最大の要因は、この制度における白人男性と黒人女性との関係にあった。「私たちは、売春婦に囲まれて暮らしている」と彼女は記す。奴隷所有者である白人男性たちは、奴隷という財産を増やすため、そして自らの欲求を満たすために、奴隷女性に関係を強要した。その結果、「この男たちは、妻と妾とともに同じ家に暮らし、どの家にもいる混血の子供は、白人の子供と瓜ふたつである。

女主人ならば、その家にいる混血の子供たちの父親がだれであるかぐらいはわかっている」のである。<sup>14</sup>

アンティベラム期の南部社会において、プランターの妻たちは、プランテーションで暮らすものたちの衣食住について適切な配慮を払うなど、プランテーション維持のために大切な役割を担うことが多かった。その一方で、彼女たちは、優しい女主人として美化され、理想化される傾向もあった。純潔で、敬虔で、従順な存在として捉えられ、それとともに彼女たちの生活もそのような道徳的規範に縛られることになった。<sup>15</sup>

そういった白人女性に比べ、南部の白人男性は奴隷女性との婚外交渉、放蕩が黙認されていた。夫ジェームズの奴隷女性との関係については日記には何の言及もないが、メアリの身近では、義理の父親ジェームズ・チェスナット・Sr. がその典型的な例であった。日記のなかでメアリは、奴隷女性との関係や産ませた子供の数を自慢する彼の様子について述べている。しかしながら、その義理の父と仲が悪いというわけではなかった。愛想がよく社交家であったメアリは彼のお気に入りでもあったし、彼の奴隷女性との関係に対しては心よく思っただけではなかったものの、彼に対してとくに嫌悪感を抱いたり、反発したりすることはなかったようである。<sup>16</sup>

チェスナットの非難の眼差しは、むしろ白人男性の相手となる奴隷女性に向けられたのではないか。黒人女性は、道徳に縛られた南部の白人女性とはちょうど逆の存在であったといえる。当時、黒人は動物的であり、性的欲求が強いと

14. PMC, p.42. 奴隷制の悪影響を訴える白人女性については、Fox-Genovese, pp.365-371参照。

15. William R. Taylor, *Cavalier and Yankee: The Old South and American National Character* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1979), pp.162-165; Anne Goodwyn Jones, *Tomorrow is Another Day: The Woman Writer in the South, 1859-1936* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), pp.3-50.

16. PMC, pp.42, 82; Muhlenfeld, *Mary Boykin Chesnut*, pp.43-51.

13. PMC, p.164; MCCW, pp.199, 211, 113-114.

考えられていた。また、黒人女性は白人男性との関係を望んでいるかのようにさえ思われた。チェスナットの日記のなかに次のような記述がある。「今日、私は奴隷の競売を見た——絹のドレスを着た混血の女たち——そのうちの若い娘が台の上に立っていた。きれいだ——うちのナンシーのように——恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに競り手の男を見ていた」。チェスナットは「絹のドレス」を強調する。事もあろうに白人女性のための絹のドレスを奴隷が身につけているのではないか。そして、まるで売春婦のように白人男性にむかって誘惑するような視線を投げ掛けている。黒人女性は、チェスナットにとって、白人女性には享受できない性の面での自由が許されているように映ったのかもしれない。<sup>17</sup>

白人女性のみが貞節を求められ、白人男性と黒人女性が誰はばからず関係をもつことができるこの南部社会の現実、チェスナットに限らず、彼女のまわりの白人女性たちを苛立たせることであった。チェスナットは自分自身の苛立ちは表には出していないが、まわりの自分と同じ立場の女性たちについて次のように記している。南部の「女性は立派ではあるが、いろいろと猥褻な話をする。けっして過ちを犯すようなことはないが、昼も夜も・・・の話をしている」のである。チェスナットは、そのような話題に「時にはうんざりしてしまうこともあったが、彼女たちは行動面では神が創造した最も純潔な女性たちであるように思える」のであった。<sup>18</sup>

このように南部奴隷制社会の中で性の束縛をうけたような状態で暮らす白人女性とは対照的に、まるで性の自由が与えられたように多くの混血の子供を産む黒人女性は、彼女の眼には、まさに多産の象徴として映ったに違いない。事実、彼女のプランテーションの奴隷女性たちも多くの子供があり、それが主人と奴隷女性との関係の産物だと思えば、ますます行き場のない

憤りを感じたことであろう。

チェスナットの場合、とくに彼女自身に子供ができなかったという個人的理由が、こういった黒人女性に対する見方を助長したはずである。彼女が結婚したジェイムズは裕福な南部プランテーション階級のただ一人の後継ぎ息子であったが、まわりの強い期待にもかかわらず、ついに夫婦は子供には恵まれなかった。後継ぎを産めなかったことに対する周囲の、とくにジェイムズの両親の目には厳しいものがあつた。自分が産ませた子供の人数が全部で何人かも知らない義理の父は、女の価値は産んだ子供の数による、と考えている。義理の母が、孫が27人もいることを自慢すると、義理の父は、妻に向かって「それだけの子供を産んだのだから、この世では役立たずの女ではなかったということだ」とほめる。それを聞いたメアリは「ではこの私はどうなるのか。自分自身にとっても、ほかの人にとっても、何の役にも立っていないと言うのか」と心の中で苦悶する。それだけに、親しい友人が子供を産み、その子を抱く様子を見て、「女性が真の美しさを身につけるには母親になることが必要だ」と感じることもさへあつた。深く傷つく彼女の姿を想像するのは容易であろう。<sup>19</sup>

チェスナットは、自分は一人前の女性として大切な要素が欠けているように思ったかもしれない。白人男性と関係を持ち、その子供を産む奴隷女性を目のあたりにすると、自分の境遇がなおさら意識され、気が滅入るだけでなく、女性としての自分に脅威を与える存在として映ったことであろう。自分より劣等な奴隷たちにとっても容易く子供が産め、奴隷の数はますます増えるのに、白人エリートの中にはただ一人の子供もできず、名門チェスナット家に後継ぎがないのはどうしてか。

このように、チェスナットにとって、奴隷制の悪を具体的に表すものは、白人男性と黒人女性との関係であり、彼女の批判の目はとくに奴隷女性に対して向けられていたと考えられる。

17. Deborah Gray White, *Ar'n't I a Woman?: Female Slaves in the Plantation South* (New York: Norton, 1985), pp.27-61; PMC, p.21.

18. PMC, p.42.

19. PMC, pp.44-45; MCCW, p.105.

奴隷制度の犠牲者であるはずの黒人女性に対して、彼女が同情や理解を示し得なかったのも当然であろう。「南部の女性は天使のように純粹であるが、社会的に邪悪なもうひとつの人種に取り囲まれている」。表だって言うことはなくとも、チェスナットと同じような理由で奴隷制に嫌悪感を抱く南部女性もきっと多かったに違いない。<sup>20</sup>チェスナットの奴隷制批判はたしかに一面的ではあるが、そのなかに克明に見えてくるのは、奴隷制社会における白人女性の置かれた立場である。彼女が送った生涯とその一部を記した日記から、白人男性が支配する南部社会においては、ある意味ではこれまた犠牲者とも言える白人女性の姿が浮かび上がってくるのである。

チェスナット家のマルベリー・プランテーションでは、肩身の狭くなるような窮屈な暮らしを送っていたチェスナットにとって、多少なりとも本来の自分らしさを取り戻せたのが、南部上流社会における社交の場であった。彼女は、さまざまな人と親しく付き合い、だれからも好かれる魅力ある知的な女性であった。戦争の末期に至るまで、チェスナット夫婦の居場所は、南部指導層の人々の集うところとなった。しかしながら、この社交の世界にしても、夫の地位によってもたらされるものであって、女性の活動できる範囲はごく限られたものであった。メアリ・チェスナットは野心家ではあったが、自分が女性であることはどうすることもできなかった。幼い頃より関心を抱いていた政治にも自らは関わることはできず、また、北部人と対決するために南部連合軍の一員となることも叶わない。メアリはいつも夫の地位に頼らざるをえないのである。ジェームズは彼女ほどには意欲的ではなく、まわりにいる男たちも彼と大して変わらない。腑甲斐なくさえ見える南部男性たちを評して彼女は次のように言う。「こんな控えめで、用心深く、怠惰な男たちに、私の無鉄

砲な気力を少しでも吹きこんでやりたいものだ」<sup>21</sup>

チェスナットは、幾度となく自分が男であったらと残念に思うことがあった。日記のなかにも頻繁にその気持ちが表明される。「もし私が男であったら、ヴァージニアでの戦いが終わるまでは、こんなところで居眠りしたり、酒を飲んだり、くだらない話をしたりはしないだろう」。そして「もし私がこの戦争で男であったら、ただちに敵に殺されていたか、あるいは功労をたて、南部連合国のために役立っていただろう」とも言う。チェスナットは人一倍自尊心が強い女性であった。であるからこそ、自分や南部女性の置かれた境遇に息苦しさを感じていたことは確かである。そしてそのような女性の身の上を、時には、奴隷にたとえることさえしたのだ。「結局、妻ほどに奴隷状態に置かれたものはいない」。さらに、「結婚した女性、そして父親と一つ屋根に暮らす子供たちや娘たちは、皆、奴隷である」と言う。あの偏見を持って見下していた奴隷に我が身をたとえるとはなんとも皮肉なことではあるが、チェスナットは当時の奴隷制南部のような男性が主導権を握る社会において、女性の置かれた状況がいかにひどいものか、強い憤りさえ感じていたに違いない。<sup>22</sup>

#### IV

南北戦争が終わると、チェスナットの記事も終わる。そのなかに書きとめられていたのは、戦争にのめり込んでいく「古き良き」南部と、そしてそれが崩れ去っていく姿である。南部連合の頂点に立った人々の意気高揚と、そしてその後にくる意気消沈の様子がそこから伝わってくる。そして状況を見守るメアリ・ボイキン・チェスナットという一人の南部女性の率直な心の内がうつし出される。

21. *PMC*, p.63.

20. *PMC*, p.43. Minrose C. Gwin, *Black and White Women of the Old South: The Peculiar Sisterhood in American Literature* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1985), pp.99-101.

22. *PMC*, pp.74, 179-180; *MCCW*, pp.59, 729. このような、従属状態を表す意味での「奴隷」「奴隷制度」という言葉の使われ方については、Collins, p.133を参照。

敗戦後の荒廃した南部において、チェスナットは経済的にも精神的にも多難な日々を送った。戦後の長い年月は、彼女にとって、南北戦争中わが身に起こった出来事を思い出し、その意味を問い直す時間となったのであろう。その一つの結果が、もとの日記に手を加えて1884年に執筆し終えた「日記」であった。そこでは、戦争中の日記にあった感情の起伏、他人の中傷といった面が弱まり、自分の過去を振り返り、それを他人に語ろうとする晩年のチェスナットの姿が見られる。そして、ウッドワードが指摘するように、チェスナットは「自分が記録する歴史に対して非常に責任を感じていた」と考えられるのである。<sup>23</sup>

これらの日記や「日記」のなかに浮かび上がってくるのは、南北戦争に直面する南部奴隷制社会の中に生きる一人の南部上流階級の女性、メアリ・チェスナット自身の姿である。南部に生まれ育った彼女が、自らの土地へ愛着を持ち、北部に対して反発し、偏見に満ちた黒人観をもつに至ったのは自然なことであった。この南部的な女性であったチェスナットの奴隷制批判は、一見奇異にも思えるが、これも奴隷制を堅持する南部社会や南部人を非難するものではなく、

奴隷制の一側面に対する反発からのものであるといえる。白人男性と関係し、混血の子供を産む奴隷女性に対する彼女の嫌悪感は、奴隷制社会における白人女性の置かれた境遇を物語るものであるが、子供のいなかったチェスナットにそうした意識が一層増幅されたのも当然と言えよう。

チェスナットの奴隷制に対する見方は狭い見地に立ったものであると言える。しかし、十分な教育を受けていたチェスナットは、さまざまな価値観をもつ社会が存在することをよく認識していたし、自分自身の見方の限界にも気付いていたようである。奴隷制を批判しつつ、次のように彼女は言う。「おそらく、世界の他の場所においてもこのことと同じように良くないかもしれないが、私が見ることができるのはここだけなのだ」。そして、「私は自分の見る範囲でしか判断できない」と言う。彼女の奴隷制批判は、差別を生み出す白人男性中心の社会の構造に対して洞察を加えることなく、表面的なものに終わっているが、南部奴隷制社会の頂点で暮らすチェスナットには、現実に自分たちの住む世界とその経済的基盤を根底から覆すような批判はできなかつたに違いない。<sup>24</sup>

23. MCCW, p. xxvii.

24. MCCW, p. 308; PMC, p. 42.